

12月 留学月例報告書【フランス・ニース】

鱸真菜

01- クリスマスマーケット体験

12月。ずっと楽しみにしていたこの季節がやってきました！フランスでは、クリスマスは単なるイベントではなく、生活全体に溶け込んだ「文化」として感じられます。ハロウィンが終わると同時に街中がクリスマスモード一色に染まります。学校でも、クリスマスツリーが設置され、学生一人ひとりの名前が加工されたオーナメントが飾られ、親しみやすく温かい空間を演出していました。このように、フランスでは学校や公共の場も含め、人々が一体となってクリスマスを楽しむ姿勢が感じられます。

私が滞在している南仏のニースでは、11月29日から翌年の1月1日まで、マセナ広場周辺でクリスマスマーケットが開催されました。会場は驚くほどの人混みで、平日にもかかわらず、多くの人で賑わっていました。

マーケット内では、多彩なフードスタンドが並び、ホットワインの香りが漂っていました。現地の人々は寒さの中、ホットワイン片手に友人や家族との時間を楽しむのが習慣のようです。ホットワイン以外にも、子供向けにはホットチョコレートやホットアップルジュースなども用意されていました。

特に印象深かったのは、目の前でラクレットチーズを溶かして料理にかける光景です。日本のお祭りなどではあまり見られない光景だったので、とてもワクワクしました。他にも屋外で大胆に焼かれ、食欲をそそるお肉料理を見かけましたが、自身の胃のキャパシティと相談して、今回は諦めました。

このクリスマスマーケットを通して感じたのは、フランスの人々が大切にしている「時間と場を共有すること」の価値です。単に食事や買い物を楽しむだけでなく、人と人とのつながりを温める場として機能しているように感じました。日常の中にこうした特別なひとときを取り入れる文化は、非常に豊かで心温まるものでした。また、クリスマスマーケットの魅力はその場の「空気感」にあります。煌びやかな光、賑やかな音楽、そして漂う美味しい香り。それら全てが混ざり合い、非日常を感じさせてくれます。この体験を通して、私はフランスの冬とクリスマスの特別さを深く感じることができました。そして、こうした経験が



自分の文化理解を広げる貴重な一歩になったと感じています。



02- 授業の後半戦

授業もいよいよ後半戦に突入しました。メインとなる授業では、自分自身の制作物のイメージを具体化するため、素材の考案や試作を進めています。印象的だったのは、サステナブルな取り組みとしてコーヒカスから作られた素材など、ユニークな試作品が次々と提案されていたことです。こうした素材を活用し、「サステナブル」を具体的な行動に移している点に感銘を受けました。

私自身も最終発表に向けて、試行錯誤しながら制作を進めています。授業を通じて、素材選びやデザインに対する考え方がより広がっていると感じています。最後までしっかりと取り組み、満足のいく発表を目指します。

さらに、年末の最終週には、通常の授業とは異なる特別プログラム「BootCampWeek」が開講されました。これは、文芸大でいうところの集中講義に似た形式で、1週間かけて、一つのテーマについて制作から発表までを行う授業です。開講される授業は4種類ほどあり、私はパッケージデザインを選択しました。この授業では、既存の製品に対する問題点や課題点を見つめ直し、よりサステナブルなパッケージデザインを提案することが求められました。具体的には、素材が環境に与える負荷や再利用の可能性、輸送効率など多角的な視点で課題を洗い出しました。その後、それらの課題を解決する新しいデザイン案のプロトタイプを製作し、最終的にはクラス全体の前でプレゼンテーションを行いました。この短期間での集中制作は大変でしたが、講師からフィードバックや、他の方のさまざまなアイデアから得られる新しい知見は非常に刺激的で、多くの学びがありました。

03- 打ち上げ？

年内最後の授業が終了すると、日本で言う「打ち上げ」のようなイベントが開催されました。街中のクラブで行われるとのことで、フランスの若者たちの音楽や文化を体験

しました。

夜9時ごろ、まずは友達の家に集まりました。お酒を飲んだり写真を撮ったりしながら、リラックスした雰囲気楽しい時間を過ごしました。その後、23時ごろになるとみんなで街のクラブへ移動。外観は一見レストランのように見える建物でしたが、2階に上がるとそこは爆音の音楽が鳴り響き、若者たちが身動きが取れないほどの熱気の中でダンスを楽しんでいました。この活気あふれる空間に最初は少し圧倒されましたが、話したことのなかったクラスメートと会話する機会があり、フランスのメジャーな音楽も体験できたのは素晴らしい経験でした。とはいえ、混雑している場所ならではの注意も必要です。人混みの中には少し怪しい動きをしている人もちらほら見かけましたが、現地の学生たちが気を配り、守ってくれたおかげで安心して楽しむことができました。このような場での仲間の支えの大切さを改めて実感しました。

また、次に訪れたクラブでは入場時にIDの提示を求められる場面がありました。日本人は若く見られることが多いという話を聞いていたので念のため持参していましたが、実際に私だけ確認されたときは少し恥ずかしかったです。日本では見たことのないことも多く、例えばクラブで提供されるテキーラの種類には驚かされました。中にはクリームが乗ったものなど、ユニークなものもありました。私はテキーラが得意ではないので飲みませんでしたが、こうした違いも異文化体験として面白く感じました。

この打ち上げは、フランスの若者たちの楽しみ方や文化に触れる貴重な機会でした。音楽やダンスを通じて新たな交流が生まれる場に参加できたこと、そして異文化をより身近に感じられたことは、留学中の忘れられない思い出の一つとなりました。

04- アルザス地方でのクリスマス体験

年末のホリデーには、本場のクリスマスの雰囲気をさらに深く味わうためにアルザス地方のストラスブールとコルマールを訪れました。この地域はフランスとドイツの国境に位置し、歴史的にドイツ領だった時代もあるため、街中ではフランス語だけでなくドイツ語の表記も目にすることがありました。

ストラスブールは、街全体がまるでクリスマスのテーマパークのように華やかに装飾されていました。ニースのクリスマスマーケットが一ヶ所に集中しているのとは異なり、

ストラスブールやコルマールでは街中の至る所でマーケットが開かれており、全てをめぐるのが難しいほどの規模でした。歴史ある街並みとクリスマスの装飾が見事に調和していて、歩いているだけでも絵本のような光景に包まれる特別な時間を過ごしました。

コルマールでは、特にアルザス建築の美しさに目を奪われました。石畳の道に並ぶ木



組の家や「ハウルの動く城」のモデルとなった建築も見られるなど、まるで物語の中に迷い込んだような感覚を覚え、ジブリ映画が大好きな私にとっては至福の時間でした。この町で過ごした時間はゆったりと流れ、日常とは異なる穏やかさを感じることができました。

食事の面でも、アルザス地方では新鮮な体験ができました。クリスマスマーケットでは、郷土料理を手軽に楽しむことができ、レストランに入ることなく地元の味を堪能できるのが魅力的でした。タルトフランベ（薄焼きのピザのような料理）やシュークルートなどを味わいながら、町の美しい景観と共に食文化に触れるとても素敵な時間を楽しみました。ストラスブールでは、特にヴォーバンダムに保管された彫刻が印象深かったです。保存された彫刻が柵の中に無造作に並び、今にも動き出しそうな緊張感が漂う独特の雰囲気を感じました。また、屋上から一望した街の景色は壮大でした。

アルザス地方で過ごした数日間は、ただの観光ではなく、歴史や文化に触れたとても貴重な経験でした。クリスマスという特別な季節が、この地域の魅力をより一層引き立てていたように感じます。春や夏には、また違う景色を楽しめるそうなので、訪れてみたいです。



05- フランスのクリスマスの過ごし方

クリスマスイブには、アパートの大家さんからディナーにご招待いただき、現地のクリスマスの過ごし方を間近で体験しました。ディナーは大家さんが準備してくださり、フランスの家庭の味を堪能することができました。食前酒とともに提供された前菜や、フォアグラ、ポテトのグラタンとホロホロ鳥のメインディッシュ、豊富な種類のチーズなど日本ではあまり体験できない贅沢な時間でした。

さらに、大家さんからはクリスマスプレゼントや折り鶴の置物もいただきました。大家さんの娘さんが丁寧に作られた折り鶴は日本文化への興味と温かい気持ちが感じられる特別なものでした。また、日本のクリスマスの過ごし方や茶道の文化、袋麺の話題から、フランスのクリスマス文化についてのお話まで、多岐にわたる話題で盛り上がりました。文化の違いを共有しながらも共感する場面が多く、言葉や文化の壁を超えた交流ができました。

ディナーの合間には、たくさんの猫ちゃん、ワンちゃんと遊ぶ機会もありました。お家には数匹の犬や猫がいて、その可愛らしさに心が癒されました。帰り際には、私を送ってくださるついでに犬たちの散歩に出かけました。自由に動き回る2匹の犬に翻弄される様子は微笑ましく、楽しい時間を過ごしました。この夜は、フランスの文化だけでなく、大家さんの優しさや暖かさに触れる機会でもありました。このような交流が留学

生活の魅力であり、大切な経験になったと感じています。

